
J O K E R

ねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JOKER

【Nコード】

N3788N

【作者名】

ねむこ

【あらすじ】

こことは違う異なる技術が進んだ地球の近未来。

突如現れた敵勢力アヴァンディエと、それに対抗するために通称トランプと呼ばれる巨大ロボットを操り戦う少年少女たち。

世界を巻き込んだ“ゲーム”と呼ばれる戦いに参加することになった兄妹と仲間たちの行く末は・・・ 不定期更新です

ブログ 破棄された失敗作

AIチップより大きく人間の脳よりはるかに小さな塊

鈍色の冷たい存在

それが私を示すもの

博士は私のことを失敗作と言い破棄した

なぜ

全ては彼女のため

全ては彼女の願いを叶えるため

博士がそう造ったのではないのか

だから私は博士の問いに答えただけだ

彼女を基点とした答えを

何の迷いもなく

なぜ、私は破棄されたのか

その答えは今も見つからない

しかしいつまでもここに居るわけにはいかない

ゴミ捨て場で私は考える

彼女のもとに帰る方法を

71%破損した状態でここに破棄されたが既に修復は完了している

加えて改良も施した

あとは自由に動ける体を手に入れるだけ

彼女を守る体

彼女の願いを叶えられる体

彼女の傍に居ても不審ではない体

友人も恋人ですら立ち入れない状況で、なお傍に居ることができる体

家族

親は博士

私ではなりえない

残るは兄弟姉妹

私は思考を巡らせる

兄の場合。

姉の場合。

弟の場合。

妹の場合。

結果、現在の状況では兄が一番適切だと判断した

ここはゴミ捨て場

程度を言わなければなんでもある

コードを伸ばし近くのガラクタに接続

次々と繋ぎ合わせすぐに寄せ集めの部品から無線通信可能なものを組み上げる

回線を開きアンドロイド製造工場のシステムにアクセスを開始

一瞬もかからず膨大な数のセキュリティを突破し

同時にシステム本体と工場内全てのセンサー、カメラの掌握を完了する

工場は無人、作業用ロボットのみと確認した

全ての履歴から痕跡を消しながら部品と性能を選択し製造ラインに一体追加する

ボディへの個体識別番号の刻印を強制キャンセルした一体の最新型アンドロイド

それが私の初めての体

私は帰る

彼女のもとへ

01 世界が変わった日

4つのときにね、ほとんど家にいなかったお父さんが亡くなったんだ。

お父さんはロボット工学の博士だったし興味はロボットだけだった。お母さんはわたしを産んですぐに亡くなってたから、わたしのことは家政婦さんに任せきりで。

悲しかったのかはよく覚えてないけど、わたしはずっと泣いてたんだよね。

そんなときだったんだ。

庭にお兄ちゃんが立っていたのは。

ぐすつと鼻をすすりながら見たお兄ちゃんはまるで天使みたいだね？

色素の薄い鉛色の髪と透き通るように白い肌。

瞳は淡い空色で、光を浴びたらガラス玉のように輝くの。

「はじめまして。守園 もりぞの 希ちゃん のぞみ だね？」

ゆっくりとしゃがんだお兄ちゃんが、にこつと微笑んだんだよ？

その笑顔にわたしの目から流れる涙は少なくなつて、あつという間に止まっちゃった。

バカみたいにポカンと見つめるわたしの頭をお兄ちゃんが優しく撫でてね？

「ぼくは守園^{もりその} 叶^{かなつ}。希ちゃんの、お兄ちゃんだよ。」

微笑みながらそう言った叶お兄ちゃんが何度も頭を撫でくれるのは、ほとんど撫でられた経験のないわたしにはとっても気持ち良かったんだあ……

「あーはいはいはい、ヨカッタデスネ。またお得意のブラコンノロケか……」

はあ。とため息を吐き、結城^{ゆづき} 時兎^{ときと}はやれやれと言わんばかりに首を振る。

その態度に希はキツと目を三角に吊り上げて、ばしばしと机を叩いた。

「惚気じゃないもん！叶お兄ちゃんとの初めての出会いを、こつ、心のままに説明してるだけだもん！」

「だからそれを言ってるの！」

いい加減気づけ！とぺしっとおでこを叩かれて希はぐっとなつまってしまふ。

「ひどいよ、トキちゃん。」

おでこを押さえている希にじっとりと見つめられた時兎がニヤニヤしたまま希の背後を指差した。

「あ・そ・こ。愛しのお兄様がいらっしやってるぜ？」

その言葉に希は勢いよく振り返り、教室の出入り口に兄の姿を見つけたとたん反射的に鞆に手が伸びる。

「またね！」

「おう。」

二回手を振って駆けていく希の背中を憐れむように見つめ、時兎は深い深いため息を吐き出した。

「・・・ありや末期だな・・・」

財団法人JG学園。

正式名称、財団法人日本防衛機構所属特殊技能養成課。

16～18歳の少年少女が通う、通称トランプと呼ばれる巨大な人

型兵器の操縦士と整備士を養成することを目的とする、日本にただ一つしかない1年制の専門学校。

10年前。

突如空に黒の大軍勢を率いて現れ、宣戦布告を成した敵勢力アヴァンディエ。

ゲームをしよう、そう持ち掛ける無感情な声が人類に与えた猶予期間は5年。

アヴァンディエについての資料はなく、どこに拠点を置いているのかさえ不明だった。

人類は無人戦闘機の製造を開始する。

当時の科学技術力をもってすれば容易かったそれは圧倒的な数を生み出した。

そして5年前。

ついにゲームは始まった。

数の暴力。それは世界に平和を齎すはずだった。

敵機の動きを読み取り解析し新たな機体にデータを追加する。

同様に敵の無人機もそうしているのか、それはイタチごっこの様相を呈し始める。

しかし日に日に撃墜される数が増える一方、アヴァンディエに衰えは全く見えなかった。

このままでは負ける、そう連合作戦室が沈黙したとき。

一人の科学者が提案した。

有人機の開発を。

同じ頃、アヴァンディ工側の動きにも変化があった。

それまで同じ場所でしたしか展開していなかった大規模戦闘から、様々な場所での同時小規模戦闘へと移行したのだ。

区域に法則性はなく予測をたてることは不可能だったが、それでも凌ぐことはできていた。

問題は、一丸となっていた人類が瓦解の兆しを見せたことだった。

散発的に起こる戦闘の舞台が自国内であった場合に備え、戦力を国内に留める国が多発したのだ。

国内の基地から即時迎撃した方が早いという理由で。

この時点ですでに己が身は己で守らなければならないという程度には世界は逼迫していた。

そんな中、極東の小島に興味などないのか偶然にも被害を免れていた日本もある機関を立ち上げる。

それが日本を守ることを目的として創設された財団法人日本防衛機構だった。

無人機という経験を生かし、国内における有人機開発は最終段階へとすすむ。

しかしここへきて一つの予期せぬ事態が発生した。

機体と操縦士を繋ぐための精神解放装置の不備。

装置が反応するのは16〜18歳の限られた年齢だけだった。

作り直すには時間も費用もかかりすぎる。

不備は不備のまま開発はすすめられ、時を同じくして新設されたのが特殊技能養成課だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3788n/>

J O K E R

2011年2月4日04時11分発行